

説教 『 神から恵まれ、心を広げる 』

小河信一 牧師

マタイによる福音書 19章1節～12節

¹ イエスはこれらの言葉を語り終えると、ガリラヤを去り、ヨルダン川の向こう側のユダヤ地方に行かれた。² 大勢の群衆が従った。イエスはそこで人々の病気をいやされた。

³ ファリサイ派の人々が近寄り、イエスを試そうとして、「何か理由があれば、夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と言った。⁴ イエスはお答えになった。「あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女とにお造りになった。」⁵ そして、こうも言われた。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。⁶ だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」⁷ すると、彼らはイエスに言った。「では、なぜモーセは、離縁状を渡して離縁するように命じたのですか。」⁸ イエスは言われた。「あなたたちの心が頑固なので、モーセは妻を離縁することを許したのであって、初めからそうだったわけではない。⁹ 言うておくが、不法な結婚でもないのに妻を離縁して、他の女を妻にする者は、姦通の罪を犯すことになる。」¹⁰ 弟子たちは、「夫婦の間柄がそんなものなら、妻を迎えない方がましです」と言った。¹¹ イエスは言われた。「だれもがこの言葉を受け入れるのではなく、恵まれた者だけである。¹² 結婚できないように生まれついた者、人から結婚できないようにされた者もいるが、天の国のために結婚しない者もいる。これを受け入れることのできる人は受け入れなさい。」

「イエスはこれらの言葉を語り終え」（マタイ 19:1）、ここから新しい部分が始まっています。エルサレム上京に向かって物語が進められる（マタイ 19章-22章）と同時に、主イエスとユダヤの宗教家たち（マタイ 19:3-9）あるいは弟子たち（同上 19:10-12）との問答が繰り返されています。彼らを取り囲んでいた群衆の一人として、私たちもまたその問答に耳を傾けましょう。

マタイ福音書 19:3——

ファリサイ派の人々が近寄り、イエスを試そうとして、「何か理由があれば、夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と言った。

主イエスが「(家に) 来られた」(マタイ8:14、9:1) や「(人を) 呼び寄せた」(同上10:1、15:32) ではなく、「人々が近寄り」というように、人間の行動が先立つ時には、何か悪い予感がします。ここは、その典型です(他にマタイ15:1、16:1)。

ファリサイ派の人々の悪意は、「イエスを試そうとして」という一句に明白です。ここには、「荒野の試み」に出てくる「悪魔がイエスを誘惑する」(マタイ4:1,3) と同じ言葉が使われています。すなわち、「試そうとして」とは「罪に誘惑しようとして」という意味です。主イエスに対する、究極の悪意または傲慢ごうまんと言えましょう。

主イエスに忍び寄ったファリサイ派の人々は、一言でいえば、悪魔の手先でした。親玉の悪魔と同様に、ファリサイ派の人々は「(モーセの) 律法かなに適っているでしょうか」と聖書を持ち出し、一見、信心深い者であるかのように振る舞っています。

彼らは、離婚問題にからめて、「どうぞ聖書引用もご自由に」、そして、離縁すべき「何か理由があれば」どしどし挙げてくださいと、主イエスを挑発しています。私たち信仰者は、このような巧みな悪魔の誘惑に、どのように対処すべきなのでしょう。「私の周りに切実な離婚問題を抱えている夫婦がいる、早く解決策を知りたい」と焦ってはなりません。主イエスに先んじて、私が聖書片手に、破綻しかかっている夫婦の問題に取りかかろうとするならば、敵の術中に陥ります。

それならば、主イエス・キリストはどのように、悪魔の手先、ファリサイ派の人々に立ち向かったのでしょうか。

離婚にまつわる不毛な論議へと誘い込もうとしたファリサイ派の人々の企図を見透かすために、まず、マタイ福音書19:3-12の主イエスとファリサイ派及び弟子たちとの問答全体の流れを確認しておきましょう。

「離縁」の談義を持ちかけたファリサイ派の人々に対し――

主イエスは、「結婚」、「離縁」、「独身」の順で、議論を展開しています。

罪深い者を前にして、主イエスはその言葉そのものが、優れた説教になっている対応をなされました。端から主イエスは、「離縁」の談義に巻き込もうとしたファリサイ派の人々を一蹴いっしゅうしています。私たちならば、それに引き込まれそうになるところ、主イエスの態度は毅然としています。

マタイ福音書19:4-6――

⁴ イエスはお答えになった。「あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を

男と女とお造りになった。」⁵ そして、こうも言われた。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。⁶ だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」

なぜ、主イエスは「結婚」から話を始められたのか、は主のお答えに明らかです。

つまり、主なる神の創造の御業の初めに、「結婚」が行われたからです（創世記 2:18,21-25）。エデンの園からのアダムとエバの追放や彼らの長子カインの殺人に、結婚が先立っているというのは、神の真実であり、神の愛です。ヨハネ福音書（2:1-11）に拠れば、主イエスは最初のしるし〈神の奇跡〉をカナの婚礼において行われました。

初めに「幸いなるかな」（詩編 1:1、マタイ 5:3）を宣言される神に対し、悪魔は私たちを、結婚ではなく離婚、平和ではなく戦争、そして一致ではなく分裂の議論へと引きずり込もうとしています。

実際、私たちの世の中には、離婚・戦争・分裂などによる混乱があり、それらは緊急の課題になっています。そこでこそ、私たちが見抜くべきことは、聖書片手に、善意に満ちた顔で、私たちの間の混乱の「解決」に乗り出してくる悪魔の存在です。もしそれに私たちが気付かなければ、混乱に混乱が重なっていくばかりでしょう。

主イエス・キリストの優れた説教というのは、光のもとに神の計画と御心をあらわし、私たちにもろもろの混乱を乗り越えていく力を与えてくれるものです。

主イエスをご自身の説教の土台とした「結婚」に関する神の言葉に、次のような句があります。

創世記 2:18——

主なる神は（人・アダムに）言われた。

「人が独りているのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

「彼に合う」というのは、精確には、「彼に向き合っているような」（原語：ケネグドー）という意味です。

新共同訳では、「向き合う」から「向き」を取り外して「合う」と訳されています。「彼に合う」人・女性という観点から、その「合う」の意味は「ふさわしい」または「調和している」と解されるかもしれません。

確かに、主なる神はアダムに「合う / ふさわしい」女性エバを「結び合わせて」（マタイ 19:6）くださいました。しかし、「彼に向き合っているような」という語の深意を看過するならば、聖書が告げる結婚の秘義を捉えそこねるでしょう。

「彼に向き合っているような」という日本語「向き合う」から推測されるように、それは「合う」と同時に「対峙する / 対立する」という意味を含んでいます。

夫婦とは、神の目から見て「ふさわしい」ものであるが、いつも向き合っているがゆえに、時に「対立する」ことがあるということです。二人が真剣に向き合っていればこそ、時に対立し、アゲインストの風、向かい風が起こるのです。実際、二人の間の性格や考え方、あるいは、子育てや社会問題についてなど、いつも二人が調和しているとはかぎりません。

神は、そのことを見通したうえで、アダムにエバをめあわせられました。順風の時のみならず逆風の時こそ、それを乗り越えていくよう「助け合う者」として、二人は生活を始めたのです。視野を広げてみるならば、原初の夫婦関係において神が提示された「人に向き合っているような助け手」という姿は、神が祝福されるすべての人間関係の根本に在るものではないでしょうか。

そのような人間の交わりを祝福される神の言葉が、主イエスに「向き合っていない」ファリサイ派の人々（参照：ヨハネの手紙 — 3:10）に提示されたのは、聖なる一撃でした。神がそれぞれの人に「向き合っているような」助け手や隣人を与えられているという畏れなしには、離縁のことも独身のことも論じることはできません。

マタイ福音書 19:8——

イエスは言われた。「あなたたちの心が頑固なので、モーセは妻を離縁することを許したのであって、初めからそうだったわけではない。」

主イエスは、「先に離縁の問題を」というよこしまな誘惑に乗ることなく、幸いなる結婚を説き明かされました。それから次に、主イエスは自ら、離婚へと話を進められました。

主イエスは、「離縁状を書いて妻に渡し家を去らせた」という事例（申命記 24:1）があることを踏まえつつ、神の掟に照らして自らを省みるよう促しました。他方、ファリサイ派の人々は離縁にかこつけて、当事者同士の「何かの理由」を暴き立て、混乱を重ねさせようとしています。そこでは、自分（人間）の側の、屁理屈や言い訳が煽り立てられ、その上、離縁せざるを得ない人をも導かれる神の御心が軽んじられています。

ファリサイ派の人々は、人と「向き合っていない」という心の冷たさを彼ら自身の内に宿し、離縁の危機に瀕している人々または逆風の下にある人々を裁こうとしています。それに対

し主イエスは、「心が頑固がんこな」（マタイ 19:8）というすべての人に内在する罪深さに触れられました（参照：ヨハネ 8:7）。

「心が頑固かたくな」とは文字通り、心が乾ききって堅いことを意味しています。人の頑かたくなさには時に、神によって「結び合わされた」夫婦の関係を壊してしまう堅さがあります。

それに対して、主イエス・キリストは、男と女が神によって「結ばれた」という結婚の秘義を、苦難に打ち勝つ喜びという観点から説き明かしています。マタイ福音書 19:6「神が（二人を）結び合わせた」というその意味は、「軛くひきを共に背負う」ということです。信仰を持った夫婦が軛くひきにつながれて患難を担うとき、彼らは、十字架によって苦難を担われた主イエス・キリストと一つとされます（Ⅱコリント 1:5）。そのようにして、慰め主キリストが宿ってくださる二人の家には、苦難に打ち勝つ喜びが絶えることはありません。

仮に、二人が「軛くひきを共に背負う」という結婚の道において挫折してしまったとしても、主イエスは、結婚生活を続けている夫婦に対してと同様に、離縁してしまったその二人に対しても呼びかけています。

マタイ福音書 11:29-30 主イエスの言葉——

29 「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛くひきを負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。30 わたしの軛くひきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」

当然のことですが、離縁した時点で、永遠なる神の御子、陰府にまで下られた主イエス・キリストと人間との結び付きが断たれるわけではありません。

最後に、離婚して孤独の身となった人々にとっても傾聴に値する御言葉が主イエスによって語られました。

マタイ福音書 19:10——

弟子たちは、「夫婦の間柄まがらがそんなものなら、妻を迎えない方がましです」と言った。

相手の活発な応答を導き出す主イエスの説教なの為せる業でしょうか、結婚から離縁へ、それから、独身の問題へと話が巡りました。

確かに、「結婚できない」または「結婚しない」者は、「人に向き合っているような助手」として生きる、その人間の交わりの点で課題を抱えていると言えるでしょう。概してそれらの人々が置かれた状況は、常に「向き合う」人がそばにいるわけではなく、孤独に陥りやす

いと言えるかもしれません。だからといって、「妻を迎えない方がましです」と、自分の人生を損得勘定してみても、神と向き合い、そして隣人と向き合う幸いから遠ざかるばかりです。

マタイ福音書 19:11-12——

11 イエスは言われた。「だれもがこの言葉を受け入れるのではなく、恵まれた者だけである。12 結婚できないように生まれついた者、人から結婚できないようにされた者もいるが、天の国のために結婚しない者もいる。これを受け入れることのできる人は受け入れなさい。」

果たして、「結婚できない」または「結婚しない」人は恵まれていないのでしょうか？

「天の国のために結婚しない者」、すなわち、パウロをはじめ初代教会の伝道者の周りには、その人に「向き合っていた」同労者、教会の兄弟姉妹、あるいは彼らの親族がいました。まさに夫婦のように、健やかな時も病む時も、互いに愛し支え合っていました。そして、彼らは何よりも、神と「向き合う」こと、祈ること、伝道することに専心していました（I コリント 7:32、I テモテ 5:5）。

マタイ福音書 19:11 を典拠にしている本日の説教題「神から恵まれ、心を広げる」について留意していただきたいことがあります。

主イエスは、「神から恵まれた」人だけが、「受け入れる」、すなわち、「心を広げる」ことができると語っておられます。神からの義務ではなく、神への感謝として、「心を広げなさい」（他にII コリント 6:13）と命じておられます。

〈受身〉「神から恵まれる」から、〈能動〉私たちの「心を広げる」へ——先行する神の業から、今の私たちの応答へ——信仰の道筋が明確にされています。そこで私たちは、神への応答を途切れさせないように、日毎に主の御言葉に傾聴し、それを心に「受け入れる」のです。

「神から恵まれる」というマタイ 19:11 の句には、何によって私たちが恵まれた者になるのか、は書かれていません。

その公生涯において伝道され、まさに、結婚、離婚、独身について説教されている主イエス・キリストが成し遂げられようとしていた、私たちにとってはすでに成し遂げられてしまった十字架と復活の御業によって、主の御前に悔い改める人は「神から恵まれた」のです。実際、主イエスのマタイ福音書 19 章の説教は、20:17-19 の「死と復活の予告」で頂点を迎えます。

おうおう

往往にして否定的に受け止められがちな離婚や独身の問題も、キリストの救い、そして福音の光に照らして考えるのが、正しい道筋です。キリストの救いに基づいて、人生における重大事を、どのような逆境に陥ろうとも、主にあって解決に導かれるように祈りましょう。

主イエス・キリストは、ひとり人間が成長し、結婚、離婚、独身などの生活を営んでいく、その人生行路を見守っておられます。「人が独りであるのは良くない」（創世記 2:18）と心を配られる神は、アダムとエバに与えられた祝福を、今日も私たちの上に注ぎ続けておられます。